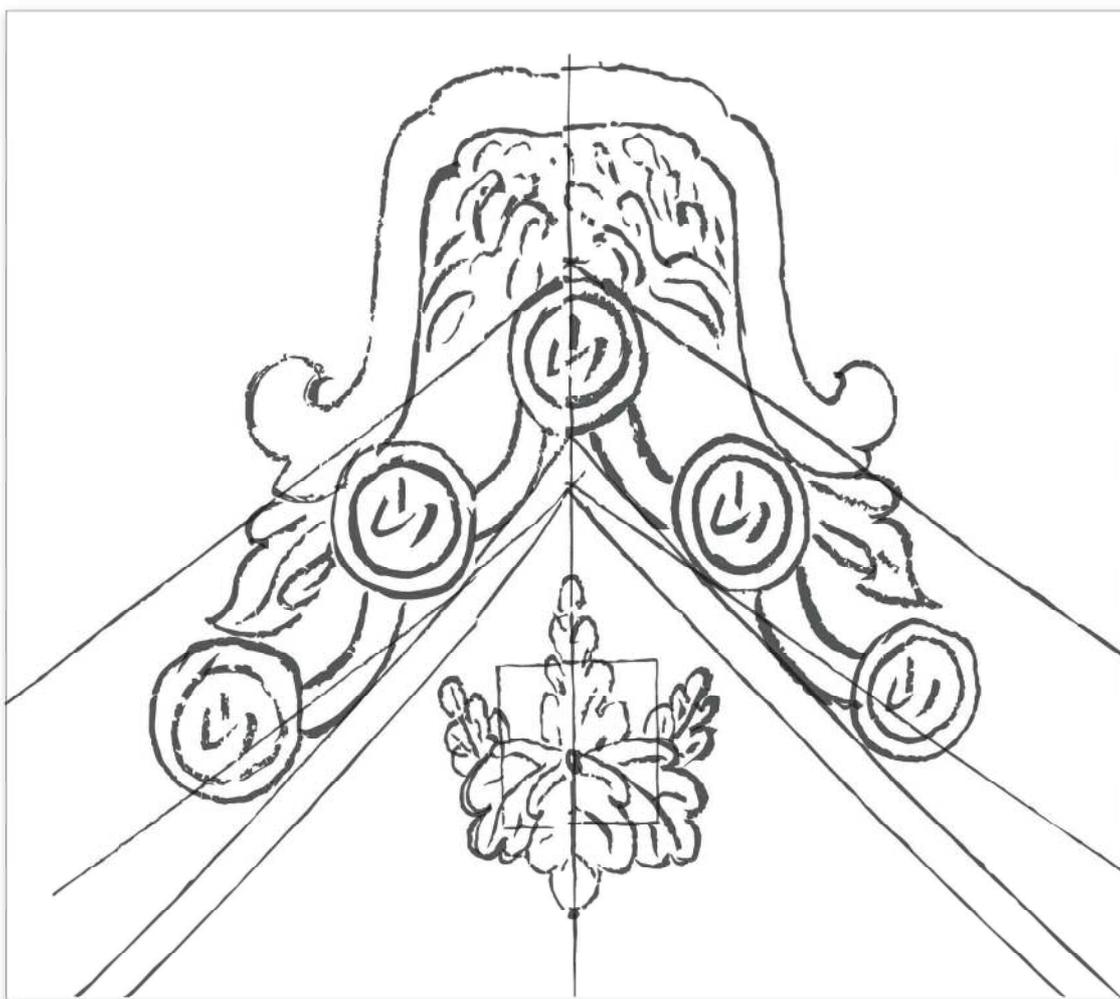


# 歴史館だより



「御殿守之たてぢわり」最上層拝部分(トレース図)

- 山形城築城660年記念
  - ・ 山形城の天守閣について
  - ・ 山形城の瓦出現期の様相について
- 最上義光歴史館サポーター「義光会だより」No.8
- 最上義光連歌の世界②
- 研究余滴⑰「義光周辺の芸文活動」

No.25  
2018年3月発行



最上義光歴史館

〈山形城築城六六〇年記念〉

山形城の天守閣について

吉田 欽

一 謎の天守閣図面

鶴岡市郷土資料館には小林家史料という史料群が所蔵されているが、その中に「御殿守之たてぢわり」という謎の天守閣図面（小林家史料一八二）がある。この図面は縦約三六八cm、横約三三一cmという、とても大きな図面である。そこに石垣上に聳える五層の大天守閣が描かれている。このように大きな図面であるため、簡単に写真を撮影して紹介することが難しいので、トレース図を作製した（図1）。さて「御殿守」は天守のこと、「たてぢわり」は立面図のこと、本図は天守の立断面図を描いているが、残念ながらどの城の天守なのかは不明である。

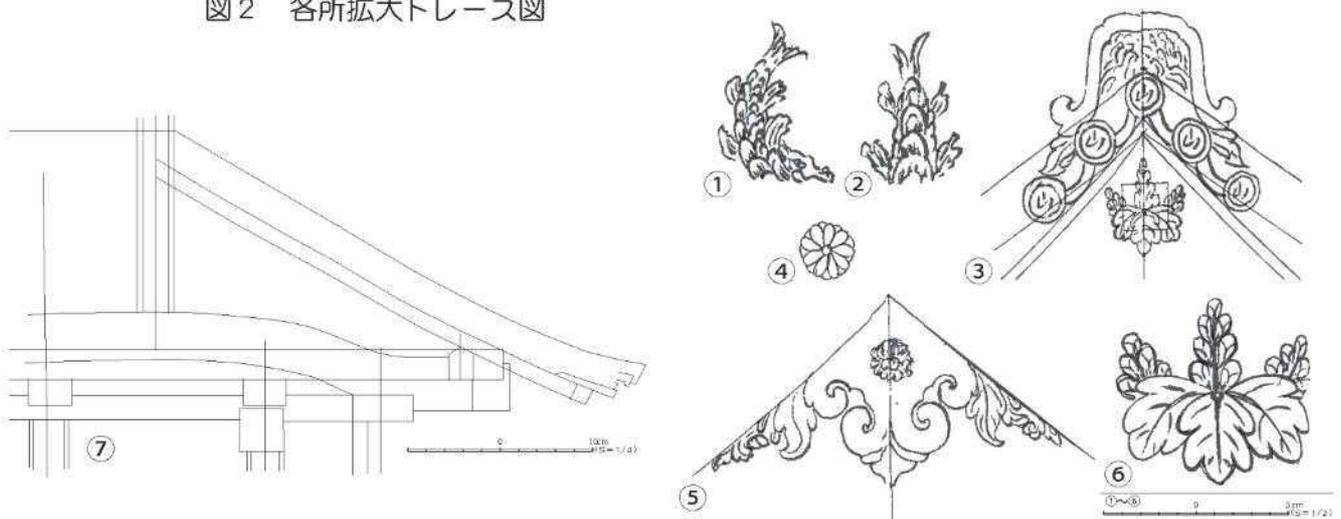
小林家史料の小林家とは庄内藩酒井家に仕えていた大工の家であった。とすると本図も鶴岡城の天守の設計図と考えられそうであるが、鶴岡城には天守は造られなかった。実は本図は小林家史料のうちの小澤若狭守光祐に関わる史料群に含まれている。それでは小澤光祐とは何者なのか。やはり庄内藩に關係すると考えられそうであるが、実は最上義光のものでさまざまな建築や修理に携わっていたことが確

認される。さらに「最上義光分限帳」（『山形市史』史料編1）にも光祐は最上家家臣の中に連なり、「式百石 大工頭 若狭」と見え、義光に重用されていたことがわかる。

本図が義光に仕えていた大工頭に関わるものとする、山形城の天守閣の設計図の可能性が出てくる。しかし、実際には山形城にも天守が建てられることはなく、さらに義光自身が建てる必要はないと判断したことが伝えられている。『羽源記』（『山形市史』史料編1）に次のようなエピソードが描かれている。慶長十五年（一六一〇）春、義光は家臣たちから天守の造営などを進言されたが、百姓の負担になるから天守の造営は無用であると却下したという。関ヶ原の戦いの後、五十七万石の大大名となり、また全国的にも築城ブームであったから、義光も他の大名たちと同様に山形城を一新し、大大名にふさわしい大天守閣を建設しても不思議ではない状況であった。それにも関わらず天守は無用と判断したのである。では本図は何を意味するのか。

（※4ページに続く）

図2 各所拡大トレース図





## 二 天守閣図面の性格

何城のものを示すはずの貼紙が本図裏面にあり、「□□城繪圖」と記されている。しかし、肝心の「城」の上半分から上部がちぎれていて、城の名前がわからなくなっている。恐らく〇〇城と記されていたと思われるが、現状では不明とせざるを得ない。他に、図中に二箇所、文字が記されていて、一つは石垣を説明したもので、もう一つは天守の立断面図は大体このようなものであると説明したものである。

石垣と天守の立面図の説明箇所を翻刻すると次のようになる。

(石垣の説明)

石かきたかき五間、

此つほかす七拾つほ、かたおもて也、

四方合式百八拾つほか、

(天守の立面図の説明)

御殿守之たてぢわり、大かたこれ也、

但すみ正になくならずは、世上の目、木工の

むねにあるへし、角のかたの柱のつよミ

ひき物つかいに、なほ以大工人ゝの

口伝の大事あるべし、其心を以一筆如件、

慶長拾年

櫻井越後守

十二月吉日

吉久(花押)

天守の立面図の説明に「慶長拾年十二月吉日 櫻井越後守吉久」とあり、本図を櫻井吉久が作製した

ことがわかる。一方、「柵の図」(小林家史料四〇)も、慶長十八年(一六一三)三月吉日、吉久から小澤若狭守殿に差し出されたことが記されている。これによって天守閣図面も吉久から小澤光祐に送られたことが推測できる。

また、五層目の屋根には文様が描き込まれている。菊紋と桐紋があしらわれているが、いずれも最上家も使っていたものである。本来は天皇家の紋であるが、『最上家譜』(『山形市史』史料編1)によると、勅許紋とある。または最上家は足利一門であることから、その繋がりによるとも考えられる。そして注目されるのは、入母屋の頂部、拝の部分の丸瓦に「山」の一字が描かれていることである(図2の③)。普通、丸瓦には巴文や家紋が使われることが多いが、「山」一字である。実は「山」文字瓦は山形城でも見つかっている。しかも書体は独特で基本的に共通することがわかる。ではなぜ「山」なのか。義光の書状の中には自ら「山出羽守」のように記したものがあつた。たぶん「山形」の略と考えられ、自ら「山」一字で表現していたのである。これは山形殿というブランドを強く意識していたことによると思われる。さらに「山」文字瓦は聚楽第と大坂城でも見つかっている。両城周辺に最上家の屋敷があり、そこにも「山」文字瓦が葺かれていたのである。恐らく伏見城や肥前名護屋城などにもあつたはずで、今後見つかると可能性もあろう。

このように本図には最上家の家紋や「山」文字瓦が描き込まれていた。とするとやはり山形城の天守

の設計図かと思われるのだが、結局は櫻井吉久が作製して光祐に送ったものでしかない。家紋などは光祐が書き加えたのであろう。そこで注目されるのが他にも天守の図面が二点あることである。一つは習作だが、もう一つは立面図としておおよそ完成形のようなものである(小林家史料二三四―三三)。この図も何城なのかは不明だが、恐らく光祐が作製したものと推測される。これらの図面の存在から、義光から天守造営を命じられた光祐が吉久に教えを求め、慶長十年(一六〇五)、吉久から本図が送られ、それを参考にしつつ光祐が設計を進めていたが、同十五年、義光は結局天守造営を断念したと推測できる。光祐自身が技術の集積のため、天守の情報を収集していた可能性もあると思うが、状況からするとこのようなことだったかもしれない。ひよつとしたら山形城にも大天守閣が造られた可能性がある。歴史ロマンを感じさせてくれる図面である。

(山形県立米沢女子短期大学日本史学科教授)

〔参考文献〕

高橋拓・吉田敏「庄内藩大工棟梁小林家文書(その

8)『米沢史学』二七、二〇一一年。

吉田敏「最上義光の大工頭小澤若狭と天守閣図面」

『最上氏と出羽の歴史』高志書院、二〇一四年。

吉田敏「最上義光の天守閣計画」『温故』四一、二〇

一四年。

山形市史編さん委員会他『山形市史』史料編1、

一九七三年。

# 〈山形城築城六六〇年記念〉

## 山形城の瓦出現期の様相について

齋藤 仁

### はじめに

瓦は窯業製品であり、胎土に水が浸透し冬季にそれが凍る凍害が発生するため、雪国には不向きな建築部材である。江戸後期の史料であるが、山形は「寒国故御櫓之瓦年々損スル」（山形雑記『山形市史編集資料』第六四号）と、冬季の気象条件により瓦が消耗すると強く認識されていた。それにもかかわらず、近世初頭の山形城の改修と同時に瓦が採用されるようになり、山形城での瓦採用は、城郭建築に伴うこの時期特有の政治的・社会的判断があったことは想像に難くない。この近世初頭における瓦出現期の様相と、その系譜を探ってみたい。

### 1 瓦の出現時期

山形城本丸御殿跡で、多量の近世初頭の瓦が出土しているが、多くに被熱

の痕跡が認められる（金箔瓦を含む）。これは瓦葺き建物が火災に遭ったことを示しており、その年代がわかれば、瓦出現の時期を考える重要な手掛かりとなる。本丸の火災は、十二月七日付

最上義光書状に「其上本丸二火事出来候」（秋田藩家蔵文書）とあるのが唯一である。これは年号を欠いているが、慶長四年説（『山形市史 年表・索引編』）と同七年説（宮島新一二〇一〇年「県下に残る桃山時代の城郭御殿障壁画」米沢市上杉博物館『図録戦国大名とナンバー2』）の両説あり、このどちらかとみてよいだろう。この火災より以前に、瓦は採用されているのである。では、製作年代はどこまで遡るであろうか。山形城の改修は、文禄二年（一五九三）に最上義光が「うちたてのほりふしん」（伊達家文書）について家臣に指示していることから、この段階ですでに開始されていた。「うちたて」は後の本丸を指すとみられ

る。最上氏時代は他に本丸の火災の記載はなく、現在までの発掘調査で火災の痕跡は一度のみであるため、文禄二年頃に製作された瓦が、慶長四く七年の火災で焼失したとみるべきであろう。山形城の瓦は、金箔瓦を含め、豊臣政権時代に生産が開始されたのである。

### 2 瓦の系譜

山形城で特徴的に現れる「山文」の軒丸瓦は、京の聚楽第城下町屋敷でも出土している。出土位置は、尼崎本「洛中洛外図屏風」（尼崎市教育委員会蔵）に描かれた最上義光京屋敷と位置的に近く、この瓦は最上屋敷に使用されたと考えられる。聚楽第城下町屋敷は、天皇行幸をひかえて天正十九年の京中屋敷替えによって成立した、諸大名の京の邸宅街である。ここで山文軒丸瓦が発案、採用され、本国の山形城への生産へとつながっていくのである。ところで、最上家の家紋は、足利家の庶流であることから足利家と同じ

「丸二引両」である。なぜ、瓦の文様に家紋ではなく、「山文」を採用した



山文軒丸瓦

のであろうか。現在のところ、確たる結論を持ち合わせていないが、京で初めて生産されたのであろうから、京の政治状況が反映したものと考えられる。当時、室町幕府の最後の將軍であった足利義昭はまだ存命であり（一五九七年死去）、天正十五年（一五八七）に京に帰還したのち、翌年に將軍職を辞し受戒したものの、秀吉から山城国填島に一万石を認められ、京や大坂を住まいとしていた。そのような状況で瓦の紋章を選択する際、足利家以外に「丸二引両」の紋を瓦に採用することはありえなかったと推測される。足利義昭は豊臣政権で重要なポジションを占めていたわけではないが、室町幕府將軍家の家紋と同様の紋章を最上家の瓦に採用することを避けたい意図が豊臣政権にあったことは十分考えられる。

また、京都でも出土しているのだから「山形」「山形城」という地名を示しているわけではない。最近の文献史学の研究で、特に豊臣政権時代に最上義光は「山形殿」と称されていることが知られているが、自らの呼称から「山文」の文様の採用に至ったのであろう。山形城の瓦出現期の様相は、当時の政治状況を色濃く反映しているのである。

（山形市教育委員会社会教育青少年課主幹）

# 義光会だより

No. 8  
2018年3月



題字 齋藤蕉石

## 現地研修会結果と、 私家のルーツは誰？

当歴史館のサポータークラブ「義光会」の現地研修会は、例年ですと秋頃と定着していましたが、今年度は、最上家伝来の宝刀「鬼切丸」が六月に米沢市上杉博物館で特別展示されるとのこと、急遽六月十二日に実施されました。「鬼切丸」は、ご存知のとおり、現在は重要文化財として京都の北野天満宮の社宝となっており、なかなか簡単に見る事が出来ませんので、良い機会と判断したわけです。参加者は、館長以下事務局三名、及び会員三十五名と当館顧問の片桐先生の計三十九名で午前七時に出発しました。尚、当日は、天気も良く皆さん軽やかな気分でお出された次第です。

まず、最初の研修場所は、上山市にある「中山峠」でした。この場所は、天正十六年の夏、伊達軍と最上軍がにらみ合った場所で、我が義光公の妹であり、かつ政宗公の母でもある義



中山峠(上山市)にて

姫が興にのって乗りこみ八〇日間も居続けた場所とのことで、同伴された片桐先生から、身振り手振りで熱く説明をいただきました。幸い天気も良く付近一帯が一望でき、皆さん納得顔でした。次に向かったのは本研修会の目玉である「米沢市上杉博物館」です。さっそく、当該館内にて見学したのですが、博物館の学芸員による説明と、以前からお願ひしていた前館長の布施幸一先生による刀剣の説明をうけました。この書面では書きませんが、当然「鬼切丸」についてもくわしく説明を受けました。各会員のみなさん納得顔でした。



米沢市上杉博物館にて

さらに、上杉神社内にある稽照殿においても布施先生による説明での見学となりました。

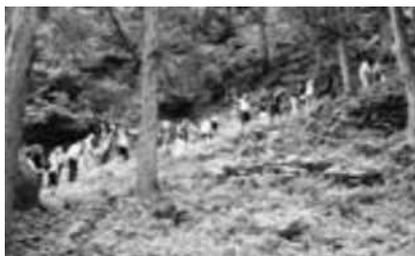
その後、近くの高級料亭「伯爵亭」において、米沢牛をメインにした美味しい昼食を頂きました。

午後は、伊達家が築城したのでないかと言われている館山城に向かい、地元の館山城保存会事務局長の小野里さんから説明をうけながら、片桐先生をはじめとして各会員の方々急な坂道を青色吐息で登りました。途中、発掘された石垣を見て、石積方法から「伊達か上杉か」等と各会員のみなさん疑問符をなげかけながらの見学となったのです。

その後も、曲輪跡や山頂の物見台跡等を汗をかきながらなんとか踏破したわけですが、やはり、座学での知識と現地を直接見て得た知識感覚が異なり、非常に良い体験となりました。

次に高畠町にある「資福寺跡」に向かったのですが、当寺は弘安年間に長井氏より建立され、その後伊達氏の学問寺として栄え、政宗公もこの寺で学問の思いを馳せての見学となり、今は石碑等、だけとなっており、ましたので、付近の地形等を見ながら、それぞれ昔を偲ぶ場所となりました。

この場所をもって、今年度の現地研修の行



館山城にて

程は終了しましたが、やはり、「現場・現物」を直に見ることが、いろんな知識へのプラスとなり、館内等の案内に生かせるのではないかと考えた次第です。次に、私家の簡単なルーツですが、苗字と家紋が恐らくも義光公と同じであり、よくお客さんから、関係について質問されその場では、義光公の隠し子の流れ等と言って笑わせており、片桐先生も、義光公の血判状とDNA鑑定でもしてみたら等と笑わせます。尚、義光公の直系の方は、京都におります。

私家では、言い伝えによると義光公に滅ぼされた谷地の白鳥十郎長久の遺児兄弟が西川町の八聖山金山神社の末蔵院に匿われ、それぞれ大聖院(最上家)と龍泉院(大滝家)「両家の裏に養順優婆塞、養元優婆塞の墓碑あり」となり、私家は、大聖院(現、神宮二十代目最上大元)の流れとなり、白鳥家の末裔と言われています。しかし、滅ぼされたのに苗字と家紋も同じ「最上」とは不思議です。その件について、河北町史とか、横清哉先生の著書「白鳥十郎公ものがたり、地域史研究覚書」等に、当時、白鳥家と最上家との姻戚関係(長久の妻が義光の娘の布姫とか、義光の長男義康の妻が長久の娘日吉姫等の所説あり)があり、その件から謎がありそうですね。つまり両家の末裔?(欲張すぎて怒られるかも)。また、神宮十四代(最上俊姓)の時、加賀前田家の仲介で京都の京極家より養子が迎えられたとの話等があり、興味深々な我最上家で、その点について本来自分で研究すべきところですが、是非にも他方本願的に誰か謎解きをお願いしたいと思います。

(義光会 会長 最上博)

# 最上義光連歌の世界②

名子 喜久雄

- 66 かへる馬屋はのるにまかする  
67 あかずしも狩場の道の暮れわたり  
68 いくかか花にまくらかりけん

紹由  
義光  
紹巴

慶長三年(一五九八)卯月十九日

賦何墙連歌

三ノ折の裏

前句である66の大意は、「夕暮れ時」道もただどしいので、馬屋に帰るのは、馬にのつたまま、その歩みにまかせる」ほどである。

この句の背景には、「韓非子・説林上」の「老馬の智」の故事がある。春秋の五霸の一人である斉の桓公が、遠征の帰りに山中で道に迷う。その時、もう役にも立たないと思われた老馬を放ち、それに従うことにより帰るを得たものである。和歌においても、この故事はすでに取り入れられている。

後撰集・恋五 思ひ忘れける人のもとにまかりて

よみ人しらず

978 夕ぐれは道も見えねどふるさとは もと来し

こまにまかせてぞ来る

返し

よみ人しらず

979 こまにこそまかせたりけれ あやなくも心の  
来ると思ひけるかな

などの作例がある。

義光はこの前句を受け、「もつと狩を続けたいのに」すでに狩場からの帰り道は、一面暮れてしまった(さあ、どのようにして帰れば良いか)「ほどの句を付ける。この句にも、「老馬の智」の故事は反映しているようが、さらに注意すべき出典がある。

「伊勢物語・八十二段」がそれと思われる。その大略は、弟・惟仁親王(清和天皇)との皇位争いに敗れ、風雅に生きる惟喬親王と、その縁辺の人々との野遊びの様である。その中の一人に業平がいる。淀川河畔の水無瀬から交野(いずれも、現大阪府北部)で、「狩はねむころにもせて、酒を飲みつつやまと歌にかかれりけり。…その木(桜)のもとに立ちてかへるに日暮れになりぬ。」すなわち、風雅や狩を楽しむあまり、時間は過ぎさってしまった。義光の「伊勢物語」摂取は、面影を取る(何となく連想させるほどの意)体のものかもしれない。ただ、68の句を考えると、(その大意は「いったい、幾日、花を求めてその下で旅寝をしていたであろうか」ほど。風流に生きた人の姿である)この推測は、あながち誤ってはいないであろう。

改めて、この推測の裏付となる68の句の背景にある「伊勢物語」の一節を示しておく。

いま狩する交野の渚の家、その院の桜、ことにおもしろし。

これらの情景から「狩」に導かれて「花」の語が触発されたと理解する。義光が「伊勢物語」を念頭に置いたことを理解した紹巴の句作なのである。

(山形大学名誉教授)

## 平成29年度事業

### 展示事業

- 企画展 《1月25日～4月2日》  
〔第9回〕市民の宝モノ2017〕
- 常設展示Ⅰ 《4月6日～7月6日》  
「鎌[Kurogane]の美2017」～武士[monofu]と日本刀」
- 特別公開 《8月2日～8月31日》  
「最上家の祖・斯波兼頼と光明寺」
- 特別展 《7月22日～9月10日》  
「山形大学附属博物館・最上義光歴史館連携展『山形の記憶2』」
- 常設展示Ⅱ 《9月13日～1月21日》  
「山形城」絵図と発掘資料から」
- 企画展 《1月24日～4月1日》  
〔第10回〕市民の宝モノ2018〕



### 普及啓発事業(主な事業)

#### ○2つも講座

- 「ヨシアキ☆すく〜る!?」～山形の殿様、義光公を知ろう!」
- ・7月4日 山形市立第一小学校 四年生
  - ・9月14日 山形市立明治小学校 六年生
  - ・10月11日 山形市立大郷小学校 四年生
  - ・10月18日 山形市立出羽小学校 四年生
  - ・11月10日 山形市立第八小学校 四年生
  - ・11月14日 山形市立第七小学校 四年生
  - ・11月24日 山形市立金井小学校 四年生
  - ・12月1日 山形市立第五小学校 四年生
  - ・12月5日 山形市立第二小学校 四年生
  - ・12月6日 山形市立西小学校 四年生
  - ・2月2日 山形市立大曾根小学校 四年生
  - ・2月7日 山形市立蔵王第三小学校 四年生

# 義光周辺の芸文活動

長谷勘三郎

京都における義光らの活動は周知のことだが、それならお膝下山形ではどうだったか。

さかのぼると一四〇〇年前後、最上二代直家の頃には室町幕府の將軍足利義満の直臣、武人にして連歌の達者朝山朝綱（梵燈庵）が出羽に滞在したといわれるから、山形にも連歌をたしなむ人々がいたと見てよいだろう。ただ、残念なことに確かな史料は今のところ見出せない。

隣接地会津出身の猪苗代兼載（一五一〇）が著した連歌作法書『若草記』は義光の愛読書だったし、彼自身の著述『連歌新式注』もあるほどだから、家臣のなかに連歌愛好者が少なからずいただろうと想像される。洛中外で催される連歌会に義光に随伴出席した最上家（関係者）をあげてみると次のよ

人名	出席数	句数	備考
最上義光	33		
最上義康	1	1	
氏家守棟	4	2	
本庄満茂	14	17	
筑紫喜伴	1	1	
江口光清	1	7	他に短連歌も
江口光景*	76	102	文禄2/2/12
江口光高*	14	1	慶長5/3/7
・光政*	27		
・光景*	14		
弥阿（光明寺）	1		文禄4/6/25
	7		文禄4/12/1

うになる。

\*を付した人物は姓名字未詳。義光の座にのみ参加。それ以外はなし。弥阿は翌年五月、近江配流中の里村紹巴を訪問し、紹巴自筆の発句懐紙を入手している。

もちろんこれ以外にもいたはずで、山形光明寺に一花堂乗阿が住職となっていた時期には、「義光公御一門方、毎度連歌之御会これあり」（光明寺由来記）といった有様だった。

「山形歌壇」とでも言えそうな盛況だったのだろう。

特に熱心だったのが、東根城主、里見薩摩のグループで、東根で催した連歌作品を京都の宗匠に届けて、通信指導まで受けていた。慶長十二年七月二十七日里見薩摩あて里村昌琢書状からは、その状況がおおかた読み取れる。一昨年は百韻一卷を見たとか、謝礼に紅花が贈られたとか、里村玄仍が急逝したとかの記事もある。惜しむらくは、東根衆の連歌作品が見つからないことだ。庄内では、わずかな文書の断簡から、志

村光惟の二句を見つけることができた。千世や引きそへぬ子の日の野辺の松 今日たつも世々にかはらぬ霞かな 庄内以外でも、最上領内のどこかに、羽人の作が埋もれているかも知れない。霧となり霞と消ゆる夕べかな  
これは、義光の黄泉の旅にお供をした寒河江肥前守の辞世として伝えられる一句である。

## 平成30年度事業

### 1. 展示事業

#### (1) 特別展・企画展

①（仮称）山形大学附属博物館共同企画展

（7月21日～9月9日）

山形大学と連携して大学の附属博物館の収蔵品を学生が選定し、企画から展示まで学生が参加する展覧会です。

②「市民の宝モノ2019展」（継続企画）

（平成30年1月22日～3月31日）

山形市民を対象に、所蔵する「宝モノ」を募集して、歴史館で選考して展示し、広く一般に公開する市民参加型の展覧会です。

#### (2) 常設展示

最上義光を主とした最上家関係資料と山形城関係資料、山形に関わる文化財などを展示紹介しながら一部コーナー展示を行います。

①「鐵の美」展（郷土の刀工）

（4月4日～7月18日）

②（仮称）収蔵名品展（絵画）

（9月12日～1月20日）

### 2. 普及啓発事業

#### (1) 歴史講座

①こども講座（小学校出張講座）

山形市内の小学校に出向いて最上義光を学ぶ機会をつくり、郷土史に対する関心と理解を深め、愛郷心の育成を図ります。

#### (2) ボランティアに係わる事業

最上義光と最上家を啓蒙することについて歴史館とともに活動する市民が、ボランティアという形で歴史館のサポーターとなつて、来館者の多様化するニーズに応え、きめ細かなサービスの提供を図るとともに、歴史館を核としたコミュニティを創出します。（年1回サポーターを募集します）

・「義光塾」

・「現地研修会」

※詳細については最上義光歴史館にお問い合わせください。

## 表紙の写真

### 「御殿守之たてぢわり」 最上層部分（トレース図）

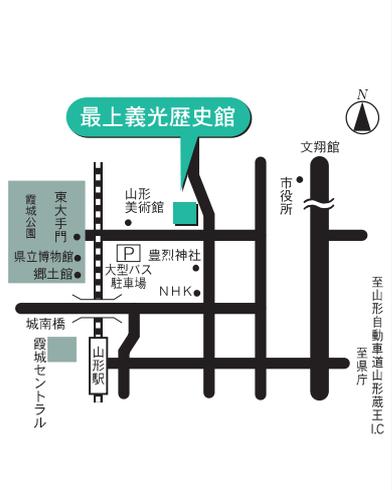
本号は、最上氏の祖・斯波兼頼が山形城を築城したとされる延文二年（一三五七）から六六〇年を記念して山形城の特集としました。  
「山形城に天守閣?!」米沢女子短期大学の吉田敬教授と高橋拓氏（飯豊町教育委員会）により『米沢史学』第二十七号（二〇一一年発行）で、これまでの伝承に一石を投じる衝撃的な内容が報告されました。  
このたびは、築城六六〇年を記念して吉田教授に本号用にあらためて執筆いただきました。

また、表紙の写真には「山文」も確認できます。山形城の屋根瓦については、山形城跡の発掘事業を担当する齋藤仁氏（山形市教育委員会）に執筆いただきました。

### ご利用について

開館時間 午前9時から午後4時30分  
入館料 無料  
休館日 月曜日（国民の祝日となる場合はその翌日）  
12月29日から1月3日  
交 通 JR山形駅より徒歩約15分  
大手町バス停留所より徒歩1分

### 来館案内図



平成30年3月発行  
編集・発行 公益財団法人山形市文化振興事業団  
最上義光歴史館  
〒990-1004  
山形市大手町1-15  
☎023-162515  
023-162517101  
http://rog-art-yoshiki.jp

印刷 株式会社大風印刷  
Okaze OKAZE CORPORATION